

准又息書日載

三十九

大正四年七月下旬起筆

特別
14
1919
288



唯又思むる日載



来ぬ日中人の来り稀なりう漫るる
ふことを得るる好し黒甜は易ふと云
ふ 大正乙卯七月十一日志

○夏時傷快を免むるに理難く、
どしとめの代わもふ快、冷印ゆる麦酒を
飲ゆるも快、

○内子よりとめと菖蓐布り大落園を
心〜〜急傷森目書と淡志いんふ
快

を以て於ても勝敗を論じ就この事柄を以て
する傾向あり海の方南を或人と云ふに互に
ありて且露の戦後、海路を人多く地固
をありし後、いづれ狭き海路より上打
何れ露艦を逐したるやと云ふこと、七海
を知らざるは生ずる海軍の日本海を以てさ
る也

○現向各元を以て困しめらるゝ元を大臣の冠
を以て裁奪せしむる官の首のあらはれともい
はせしものも、興するは其箇を以て其の長
き何んをええと測るに別せざる者の長
きことと云ふものを測りて之を以て其の長

東洋
海軍

又の四々例も、苟くも口を國政に扶きて
かちとらざる當に測りて之へて其の長を以
てしものも、可也

○今、戦後を論ずる者概ね、
世の道を以て終世研究に没せしむ終に世
にありんか、その多し、その世に否や、
其の深く終めし地平線を扱く、其の
界の地平線を扱く、其の果し、其の
其の容易の業あり、他人の事、其の
研究に、其の世人之を以て、其の
其の何んを、其の深く終めし地平線を扱く
其の但し、其の扱く、其の却り、其の

世と隔たればと云ふ徒唯々として服す

○その徒然と業を卒り在る中、**推轂**世話
よりうらむを謝す余の謝得業しとお氣
の毒ろく是等と云ふも苦勞内に入つ也
と

○つる人川崎八郎右衛門の市を成し居る原因を
維新時と江戸混乱の際、江戸は住居のよ
束と判し而して四方、致するもの相踵き土
地の傍を真つ二束三又、並つくと云ふも其
るも位ちりし時の政府と空地の各所と敷
し不体裁るるを都合の面目を言ふと有
牆屏を没くるといふと何人も無代償と土

東洋
書局

を文のふしと合す而も之れを以てこの其
りる各し牆屏を没くるといふ費用と土地を購
ふらうも貴ううしかある川崎校舎
牆屏を没くるといふ土地を貰ふは言
事、托して牆屏を没けおしとに云ふ彼
んらうを起しと大原因と云ふ

○**借書**借書三分の借氣を帯びてんは人
と云ふ人七三分の借氣を帯びてんは世に容
んる

○三味線といふもの、**物**をいふもの、**物**
の心をいふもの、**物**をいふもの、**物**
後をいふもの、**物**をいふもの、**物**

と問ぬるも或は終に世忍の紐を断りてんよ
ソモんを断らぬやア一ときむくしに流し
たりとも教へる積りなるいのみども終くは教へ
ることなるもんは人の常心あるが言を覚
こいと云いぬ人こそ好しと自分むもさす
語りの弊ししお手のこと一向に
別して若いものをお手にし其の者の性
をいんと教へるもにれを黙しん終り
先方云はぬもぬ随分ひもさすこと
相推をおつて先方の思ひごと引き出
はひらぬ事もあるぬさるうく黙つて
ひくとも忍耐も容ある出来ぬ言を黙

すともよこころ凡人の難んする所ひある大隈伯の
心も長き所ひある程所とする所も決つて出
来ぬ所ひある事人に此の流しを述べもさす
言は聴こるるなり

○ある人るん誅の字を聞か其人は誅を而世
成功の秘訣とて金言誅の字義を且く措
く君の所謂誅とてそのを誅とて、衆の字
を上る冠とせし誅の字とて誅とて作すと
言ひ悪の字を伴ひん誅日ぬか
悪徳の分子あるも誅の字を而世の所
謂る才子が誅を以て成功の秘訣とて其
誅の内容を分析せんばよき人なるといふ

一と悪分子多まる似たり試み其由余の一魂
を尋ねけんか 十、〇

疎さかゝるくとも凶滑とお交する話をも急所
を衝くとその悲うしき意味もあつて疎隙を
掘り人の性格めうと見えう人の功を培ふ猜む
るものまゝあつて飽りて平あつて人を排掃
するをいふ動もまんが陰さう動もまんが詐
謀を用ふるも目的を達せさんにはまてん
氣なり其目的を達するも平あを擇ぶ
動もまんが犠牲とす其の言動の念記
不念記河の所をみる此人の眼中に
甲のあつて平あを目的を達するも急所の

为りよじんの人格を傷け何世の疑する所とるる
七六版をみる収めたるものあり疎を誤する
個人之義を行ふ武善さう獨逸海ありんか
未あ海さう法津とそひなるへまよく二神化
に敵の人のまゝし此の疎を用ゆることの上海の社
会をみるなりと才子と云ひ下流の社会も格を
とぬ泥棒といふ

〇京都の大徳寺も桑の本山さう寺中に其
院ありさうなり〇主家治池の甘露寺さう
壇の下にさうなる家骨堂家の跡とるる
あり伊壇下に布きつる丸なる丸さう此丸
と歴代樂の傳いと納るるを例とす所と

のんこくちあつり入もあつ左入りつ一歴代え人の
此隣次一室と親ることとゆふも政也りんいま
比元入路の一元と政も
+160
の政権争奪戦しつて即位御大典の行
せんともふゆ念に臨みむも其激舌をえの
意心坦懐せんをえんハ不謹慎のそとしきぬ
而も其美し讀むは政慾を毒保ミト
あつりつ一末の^{此時}此^此御大典内閣
の清徳を美る進つるを^此疾又^此これを損奪せ
んとするの心
+160

○和歌山の城南龍公の子虎伏山竹垣の
城とよふ徳川乳倫侯に^此野城の^此野ある

東林堂製

候が竹の採集まつとつる皆を城名ともし淵
源する也や^此新ふ^此し
+16
○温泉の^此作^此人^此體^此の^此效^此神^此を^此主^此ら^此ラ^此ジ^此ユ^此ム^此の^此存
在^此に^此依^此り^此北^此の^此由^此来^此の^此流^此の^此源^此の^此地^此に
於^此て^此其^此の^此效^此を^此感^此ず^此る^此ん^此湯^此方^此を^此飛^此こ^此え
遠^此く^此輸^此し^此ラ^此ジ^此ユ^此ム^此之^此の^此伴^此ふ^此と^此思^此ふ^此を^此謀^此の^此を
一^此の^此患^此の^此を^此也^此知^此る^此を^此遠^此地^此に^此運^此ぶ
一^此を^此飛^此こ^此え^此運^此搬^此する^此也^此に^此ま^此す^此る^此を^此見^此ふ
入^此地^此に^此す
+160

○近世世界文の統果の昔々々々歎んんんん今次
○世界的観のの海軍のの如く大規模に行え
海軍のの如く長く持續し海軍のの如く莫大の人余

き[○]秋[○]瘡[○]兄[○]も[○]思[○]ひ[○]さ[○]る[○]を[○]意[○]と[○]し[○]日[○]資[○]を[○]
此[○]く[○]一[○]茅[○]屋[○]を[○]行[○]き[○]て[○]一[○]而[○]と[○]特[○]に[○]四[○]瘡[○]
屋[○]を[○]保[○]存[○]せ[○]し[○]て[○]蓋[○]し[○]英[○]世[○]の[○]事[○]を[○]待[○]つ[○]べ[○]し[○]
の[○]聲[○]を[○]奉[○]け[○]し[○]る[○]紀[○]念[○]物[○]と[○]す[○]る[○]也[○]石[○]塚[○]校[○]長[○]
の[○]案[○]内[○]に[○]此[○]の[○]瘡[○]屋[○]を[○]見[○]て[○]感[○]慨[○]拮[○]拮[○]す[○]
能[○]つ[○]す[○]言[○]と[○]楳[○]を[○]以[○]つ[○]て[○]免[○]親[○]と[○]せ[○]し[○]此[○]の[○]交[○]交[○]屋[○]
を[○]言[○]し[○]進[○]に[○]英[○]世[○]に[○]言[○]も[○]す[○]と[○]す[○]三[○]郎[○]親[○]
一[○]く[○]余[○]に[○]言[○]す[○]所[○]也[○]也[○] (十九日)

○此[○]年[○]終[○]親[○]在[○]各[○]戸[○]に[○]令[○]し[○]て[○]大[○]掃[○]除[○]を[○]行[○]ひ[○]
お[○]掃[○]除[○]掃[○]除[○]生[○]上[○]の[○]一[○]進[○]お[○]お[○]掃[○]除[○]掃[○]除[○]
の[○]際[○]異[○]を[○]上[○]け[○]し[○]掃[○]除[○]子[○]を[○]外[○]し[○]品[○]置[○]を[○]日[○]克[○]に[○]
畚[○]が[○]致[○]し[○]し[○]掃[○]除[○]子[○]を[○]徹[○]し[○]し[○]室[○]内[○]に[○]立[○]立[○]氣[○]を[○]

疏[○]を[○]一[○]に[○]一[○]に[○]最[○]も[○]の[○]也[○]唯[○]此[○]の[○]隆[○]の[○]花[○]
に[○]あ[○]則[○]の[○]品[○]置[○]と[○]叩[○]く[○]し[○]と[○]競[○]あ[○]る[○]左[○]側[○]
の[○]意[○]と[○]埃[○]と[○]右[○]側[○]の[○]意[○]と[○]交[○]換[○]す[○]る[○]品[○]置[○]は[○]元[○]
拂[○]の[○]為[○]の[○]却[○]つ[○]て[○]一[○]花[○]の[○]疾[○]速[○]を[○]競[○]す[○]る[○]也[○]
あ[○]ら[○]う[○]品[○]置[○]を[○]拂[○]ふ[○]を[○]と[○]し[○]て[○]曝[○]す[○]る[○]也[○]
●[○]意[○]を[○]用[○]ひ[○]て[○]是[○]を[○]免[○]れ[○]未[○] (日) 掃[○]除[○]の[○]
因[○]に[○]免[○]れ[○]也[○] (十九日)

○坪[○]内[○]の[○]意[○]と[○]傳[○]授[○]の[○]書[○]を[○]所[○]の[○]四[○]字[○]横[○]
書[○]の[○]一[○]幅[○]を[○]短[○]く[○]文[○]に[○]云[○]く[○]無[○]位[○]真[○]人[○]と[○]余[○]一[○]向[○]を[○]
添[○]く[○]て[○]甲[○]乙[○]丙[○]丁[○]の[○]四[○]字[○]君[○]の[○]為[○]り[○]と[○]書[○]き[○]し[○]る[○]也[○]
而[○]も[○]君[○]の[○]為[○]り[○]と[○]書[○]き[○]し[○]る[○]也[○]と[○]書[○]き[○]し[○]る[○]也[○]
也[○]こ[○]れ[○]余[○]の[○]所[○]也[○]と[○]傳[○]外[○]に[○]大[○]徳[○]寺[○]

す余輩（我）の郷土の作戦の（其）得し（し）卿等（の）の
人となりて禮と盡くし勞つて研（研）行（行）するの地と（地）研（研）
習（習）を（あ）ら（ら）し（し）新橋（新橋）の地（地）下（下）車（車）も電車（電車）に乗（乗）
（提）得（得）たり（り）車（車）一本（本）三得（得）と（と）此（此）の習（習）し（し）成（成）
事（事）し（し）常（常）り（り）常（常）：此（此）の呼（呼）吸（吸）を失（失）は（は）ず（ず）ん（ん）ば必（必）く（く）成（成）
即（即）ちん（ん）と（と）因（因）：そ（そ）の電車（電車）に乗（乗）る（る）と新橋（新橋）：松（松）と
する（す）方（方）中央（中央）停（停）車（車）休（休）止（止）する（す）便（便）を
り中央（中央）停（停）車（車）休（休）止（止）する（す）便（便）を
流（流）車（車）を流（流）す（す）連（連）し（し）余（余）ら（ら）先（先）き（き）る（る）る（る）し（し）余（余）ら（ら）
渠（渠）茅（茅）と分（分）す（す）と中央（中央）停（停）車（車）休（休）止（止）する（す）便（便）を
後（後）留（留）未（未）え（え）分（分）す（す）と由（由）り（り）上（上）
○人のらん（らん）と押（押）毛（毛）を（を）れ（れ）る（る）と（と）のあ（あ）ん（ん）い（い）ま（ま）く

東林堂製

○遊（遊）し（し）て遊（遊）く（く）吃（吃）と（と）に（に）ち（ち）と得（得）たり（り）時（時）扇（扇）
子（子）、押（押）毛（毛）す（す）人（人）其（其）あ（あ）と向（向）の研（研）習（習）場（場）あ（あ）と
人の使用（使用）より早く（早く）こ（こ）ぶ（ぶ）比較（比較）的（的）腕（腕）を
他（他）の：贈（贈）さ（さ）す（す）の便（便）あり（り）と 曰（曰）上（上）
○其（其）事（事）の私（私）人（人）も芭（芭）蕉（蕉）布（布）教（教）及（及）を（を）習（習）り（り）ま（ま）る（る）由（由）り
其（其）木（木）の浦（浦）園（園）と（と）也（也）
○趣味の教育と人の幸福を増進する一法と
ある趣味を究むれば樂（樂）こ（こ）こ（こ）に（に）生（生）す（す）所（所）の趣味
を究（究）む（む）る（る）は区域（区域）廣（廣）ろ（ろ）け（け）ん（ん）か（か）廣（廣）き（き）又（又）樂（樂）み（み）の
区域（区域）も（も）廣（廣）ろ（ろ）し（し）何（何）れ（れ）も（も）私（私）人（人）の趣味（趣味）與（與）つ（つ）て
究（究）む（む）る（る）は世（世）の中（中）に（に）在（在）る（る）點（點）と（と）す（す）る（る）
奇（奇）し（し）之（之）ら（ら）を（を）究（究）む（む）と人（人）の心（心）を（を）忘（忘）る（る）と（と）苦（苦）の

坐すを例として支那の趙次郎と他人の面前に
婦：執事とてとを誘りしるす 二十一の記

○昔しと諸侯の目前を遮き、つと不敬と

赤目を通りと花つげを赤目の前へ所へ事

人拂を力すと、^{（注）}此は中央停車場前

織骨^{（十）}唐の及大建築を力しつゝある^{（高）}

海上俵陰會社の建物^{（注）}北建物宮城

出^{（注）}高層の上は宮城内と敬視するを

得^{（注）}敬^{（注）}お目を通りの論^{（注）}起つと云

とも大正の赤^{（注）}皇室：おし之れを
不敬と云ふ^{（注）}其の時を弁せよ

者と力す、講議せり、皇室：對し斯

東洋館

此事を不敬と心得、^{（注）}皇室
と真に尊敬するの精神を揮する能
ハヤ也 二十一の記

○主喜政治を輿論政治と云ふ政治家の輿

論と輿起つる^{（注）}為め煽動政治家と云

ふも勢力をたこじむと^{（注）}得^{（注）}所へ西

洋文明開く^{（注）}於ても政治家人心を収攬する

の政治家を括らぬ煽動政治家^{（注）}唯

たありき事を煽動せよんハ煽動政

治家國政：宣言する^{（注）}却つて人心

収攬に便あり輿論政治と云ふ^{（注）}爲^{（注）}味

味^{（注）}於ける煽動政治家のみ^{（注）}爲^{（注）}

○骨董屋の物を扱つて来た三回四回
一物を買ひおとし空しく還へす事あり
唯此来、毎々政府の者を出し示して曰
く骨董屋の客は、擧りその詞を為す
このころ客は多く、月謝を拂ひ無
償に教ふ娘(自) 芽空しく還へると
半と 莫九と

二十一日記

○関西の婦人事に驚けおつらさんと叫ぶ年
輩二十と逾ちぬ人々を驚く叫びを
三十分聴けり、おとし空しく還へる
人言ひ、おとし空しく還へる、おとし
空しく還へる、おとし空しく還へる

東條実製

関東のよの完如聴くこと異秋の思を為す
○共和国の政治家と世に媚ぶる立憲國の政治家
七六同様の傾向あり政治家群を指導する
ありおとし空しく還へる、おとし空しく還へる、
政治の荒蕪る所以、本國地教政治的
知識の政治家世に媚ぶるも世に媚ぶる
○世界大戦の今日、日本七六戦多し、終
局未だ國の可なり、おとし空しく還へる、
減収稼期、おとし空しく還へる、
平生、おとし空しく還へる、
○の行りん難きを常談ある、おとし空しく還へる、
而も改反今の徒四民、向て減収稼を改

く群小：媚ゆる七舌しい哉、今日の四民一表減税本
味切輝くし時向を非せず唯く度減税と
やうくし去るにふ而し一期其黨政府に主つや其
約する所行いんす今の改進黨を公之然るも四民
を欺く者多きなり斯の所公此然世世
阿あうし時向の~~衆~~衆を回費を要する所以
と四民の大元怙を要する所以を教わす改進黨
と改進黨家を欲す蓋し斯の核なる之れを
教へんハ四民の家終に墜るハ誠也
可~~し~~んハ也
二十一の地
○~~を~~を~~る~~る~~は~~は~~此~~此と~~ぬ~~ぬ~~の~~の~~係~~係し~~る~~る~~は~~は~~竹~~竹~~の~~の~~み~~み~~か~~か~~ら~~ら
傳~~へ~~へん~~こと~~こと~~を~~を~~記~~記~~す~~す~~は~~は~~其~~其~~山~~山~~頂~~頂~~の~~の~~海~~海~~の~~の~~深~~深~~し~~し

市
東
十
八
年

初~~の~~の~~山~~山、~~海~~海~~の~~の~~深~~深~~し~~し~~る~~る~~は~~は~~竹~~竹~~の~~の~~み~~み~~か~~か~~ら~~ら
傳~~へ~~へん~~こと~~こと~~を~~を~~記~~記~~す~~す~~は~~は~~其~~其~~山~~山~~頂~~頂~~の~~の~~海~~海~~の~~の~~深~~深~~し~~し
味~~あ~~あ~~る~~る~~は~~は~~竹~~竹~~の~~の~~み~~み~~か~~か~~ら~~ら
○~~初~~初~~の~~の~~都~~都~~會~~會~~に~~に~~出~~出~~る~~る~~新~~新~~市~~市~~物~~物~~に~~に~~致~~致~~す~~す~~一~~一~~時~~時~~に~~に
失~~策~~策~~を~~を~~釀~~釀~~し~~し~~人~~人~~の~~の~~笑~~笑~~を~~を~~博~~博~~す~~す~~る~~る~~は~~は~~竹~~竹~~の~~の~~み~~み~~か~~か~~ら~~ら
毛~~布~~布~~と~~と~~さ~~さ~~ふ~~ふ~~は~~は~~蓋~~蓋~~し~~し~~田~~田~~舎~~舎~~の~~の~~漢~~漢~~也~~也
を~~貶~~貶~~し~~し~~て~~て~~謂~~謂~~ふ~~ふ~~也~~也~~都~~都~~會~~會~~新~~新~~市~~市~~物~~物~~に~~に~~致~~致~~す~~す~~は~~は~~竹~~竹~~の~~の~~み~~み~~か~~か~~ら~~ら
物~~の~~の~~珍~~珍~~し~~し~~く~~く~~映~~映~~す~~す~~る~~る~~は~~は~~竹~~竹~~の~~の~~み~~み~~か~~か~~ら~~ら
北~~の~~の~~赤~~赤~~毛~~毛~~布~~布~~の~~の~~也~~也

リ彼等と恰も異國に遊む程の興味を覚
然し其等と赤毛布とを羨せ（羨む也）

○海外に留まらざる者克余に勉勵する者少
而して帰來何物とぞ齎らざるを常とす
ハ洋行して甲斐又あると認めざる其の齎
物たる所のものたるが如く其の術は又
かゝる未だ術なきも其の借問は其の齎
らざる所のものたる何んぞめざるし
術あるとせざる又是れ其の術なきを
要せざるも何んぞ得る所あるべき
可也

○讀書の爲るは洋行するも不徒消し
（愚る）

東林書院

書と日本を格名とし得べし或る特殊の
研究と別として其術研究の爲るは洋行
するも概して不可なり概して日本を格名
し得可けんは其の術は其の術を特し
る國に出る赴き赴き爲るも但し洋行の
利益を彼國に求めざるも視且の聽
き自家の啓蒙に資するも在るのみ
西洋に赴くこと其の術を成りて赴くこと
可とす其の術の爲ることを云はば其の術
可とす長く其の術を要する一途に足る
○外交の成敗ハ外交家の手腕より國力の繁
少より多し日本ハ國力の強大日本のみ

獨り四力を比け兼としも昇其よしまつてと歐
洲^{世界}の外交家と稱ひ来りも十分の目人觀と
傳ふること難し今○世徒々外交家と云ふ
四力如何の願ふ是れ我邦の通弊也
○外交家なること難し日本に於て殊に難し善し
四力切弊としん未だ此れを知らずゆゑを亦他
を知らん^{此れ}を知らず他を知らん外來一
唯に外交^院の十全を望むも真もも假藉
するも^其所ある所あり如斯邦土に於ける外
交家^其の氣の毒なる者^也!!
○得業生^其甲乙丙丁未だ^其世の利を道と教
ふと云ふ余も大抵の事と既先輩より

東洋通

聞きしをらん余亦^其道破りて入すを要せず唯に
何人^也恐らく未だ道破せざるより極め^其喫緊
の事^也に處り^其法を^其後請^其取の
事^也に^其解^其を^其要^其を^其而^其七^其意^其の^其間
題^其も^其六^其春^其の^其間^其セ^其る^其可^其なり^其余^其を^其之^其ん^其に^其對^其し^其る^其も
諸君の勝利と比美ふと
○高科得業の者他の會社に入んとして未だ
別と先く余の^其卿^其等^其使^其の^其も^其を^其用
し^其猶^其ま^其の^其事^其を^其考^其へ^其り^其ハ^其比^其較^其的^其の^其人^其を
使役するの法を教へり^其を^其而^其して^其人^其を^其使^其役^其せ^其る^其も
^其法^其に^其至^其り^其て^其を^其恐^其らく^其未^其だ^其し^其卿^其等^其人^其を
使役せんともは先づ人^其を^其使^其役^其せ^其ん^其て^其る^其も

狭斜の消息のことき本来俗氣ある事な
平易に書けは俗氣いらく古しやるるに載
へく大なる一載もすなはた物也唯これ叙の
事と美と物と壯重と書けはわづら味ある
大新なり此種の記事と載する事業法
の心くろくすゝるものなり

○その人無趣味なるもの十の七八人の長をゆめその
目々入るもの至屏風銀餅の類の美を
紙の者無し一物も捉へおしめ入るる
常とすなはた世を度狭くするもの趣
味教育の道が又要する
○飛迹を以てる人評すべし

東林堂製

現在の地を中野とて地を乃所す
美ん共：誤ること多し

○美鞋山嶺を改海しんを常の式
免のしよをふみ山嶺をさくしよを
りし通付の活方山嶺をさくしよを
先く活方とて活方人も人山嶺無きと
らんや

○活方とて活方を鍛錬する一鑑
鑑大なるを住、病何のありあ
あゝん活方ある人の力を称する
等とて保衣しんても保衣めらんと
思

のめゆ

○陳眉のやうく人の言をきかぬ心別る之れを挽
ひ人の言をきかぬ心別る之れを挽ひ此れ満
腔の殺氣あり也といふ政権る者守を事と
するものなり乃ち是れ

(以上三十一の記)

○人外面須く渾厚をふるふし而して事
臨る果決を要す事成ゆる○と云ふ
人云

○目足を忘るるを後ろ通るる款を忘るる
の通る尤も仁人なるもの服世を日につ
たふもの是れなり

○一事を成しつるを之れを言終る現ハセ
たふもの當世にかうし今日も事を成す

東林堂

當り先づ之れを吹聴しし事を為しつる人
のいふことを欲す當世流と淡く且つ薄き
もの也

○依ふ一節曰く今の人平な口多たを説
く女為す所を説くを實事とを教訓と
十の一二閑事を料配する十の八九と誠
然る多々の人之閑事を以つて實事と
する若し閑事を云ふに除き去んば多た
と云ふものことありや

○骨董鈎の鐘鼎古銅器と吳服屋の女
帯と一般五十の金と云ふ可百金と云ふ
可二鋪の巨利を博するもの此の二品

○言者の平易な説く能はざるも其の修養未だ
足らざるなり故の世間多くと艱澁の理を説
く者も大なるありし評易の理を説く者も
強決しと為すその意の概平易に説く
の師を輕蔑する傾向あり何んを知らん艱澁
の理を為すもの多し母其故卒業後漢文
論を専ら易易なることと事定顛倒強く
六〇〇〇説く者も大なる卒業後古く教
鞭を執る〇〇所謂の黃吻の徒なりんこと
○古人讀書の要訣を説く曰く前句を讀む
後句無きなり如くせよ此書を讀む他書の無

東洋書院
印

X

きらぬとせよ凡讀書の法須く一書一
〇〇〇〇得るなりと余嘗て曰く一書を
精讀せんとせば旅中これを持ちて終始
信伴とするなり唯此書は必ずしも
信伴とせず人々心書を乱る煩累あり
而も他書を記し得るなり此書は
此書は親しむべき時なり得る所
常に信す

○獨ハ人の知ざる所而して己ん獨り心知る所也此
の秘笈の皮に就て虚心平氣に精思せよ自ら掘
掘とせよ此の美許を

と高尾らしきあり奇しく風を煽るよの一
方一と因方を結ぶよの意も八七共舞々しく因を
結ぶよの前垂るけえし懐惚し（形もよこしを
偶然以上九三〇也）

○一師及の玄海の方を高くし来る銚堂をを余
可北を去ると御（平）曰く然るを
ことろん心銚堂ハ（平）一而七流青貫し

く物之雁物と定まら元元買ひ手を得ざるこ
借見了らん（中）○典しを借

荒うより（中）○家一献して荒干のを
を借りし（中）○田舎の（中）○書處

斯く一七集も盛溜と一般るも七

東林堂

○心理是んぬま夫技巧是ん横工夫、はま工夫と
洋々入りと自得し横工夫と洩くしと汎濫、今
の高家車西あると覇を唱の者、車に在りし
観山西よりありと極風しり而して観山ことし
所心境にあり極風の書山自一種あると（中）
味ありと名もも利を横工夫、（中）観山終
に極風を厭し去らん歎

○俱楽部趣味未だ日本に於て理解せ
らんす世に人々を慕ふ時多し異哉あり
弟一一家を為す人ありし一也俱楽部
を愛する人々交いんとする己んの宅に招く
七可人に酒食を伴ふと自ら自宅に引

○家の可なり

の邊りもを修る回く柏木榑古柳と此等入雷
を恐るを空平る消統る日つり比徳の丸ら段限
の釣結ら流美に深めれ加之下くく雷を氣の
移つてハ大妻と其船底の脚を四と載せ廿
其船底の上と板を空ついで床を敷いて寝れ
りは空を修るくく修るくく

○吾輩の日記に吹く烟草、敢て一
年消費するに三十八億本、多い物、
が吹沙吹る物、吹沙吹るの巨大な
んばその足も、吹沙吹る物、吹沙吹る
の多き小指大の筒子も、其数僅しく、四十
億に元比が日本の小兒ふくしと

東林原表

○文明と何んか多く産しん多く費すを云ふ
産するそのありきしは是れ也、所多し、是れ元
の彼人として終に破産するも、其倒産
する者、文明を修るもの、易く文明の利を難し
○吾輩く人々交り、可く唯に交り不可也
○其意味、泛文と無意味、其益あるを、
の終るに於て、其益を得る、其多くの香典を支

○其物、其の核、其常時、其
其秋、其庭園、其
其之れを撤出する、其大努力を要する、其及ん
其此之れを感せ、其

筆の雄之れを秤量せば斤量大般れんて奇しき
ありしこん（一）年一生の佳果也

○帝王の怒（怒り）地圖を標法するも存るは
等の政味を己の特色料を以つて他の土
地と違ふんとするは常に染毒の國其に取
つて海陸の徑を又徑を五年を積十年
を累ぬ其その所自衛のたつとすよ七言
と此怒を元とんとたつとすよ大抵十年
の徑をを積めは器盈日の盈んば之れを
決せざるを得ず世界何れのあつての十年
毎に戦闘の見える怪しむは是らなり
○帝王の（一）趣味と國家の趣味一致し帝

東林堂製

帝王の怒乃ち國家の怒（時）有奉國一
致と云ふ此怒此趣味のゆゑと我のよの
之を愛國とすよの定と侵略の意思氣無けん

が國を防衛する能く帝王が國民を犠
牲し其怒府とするは此論據に在
り願ふは國家防衛の必（所以）要なり素
らもあつんよの傍らに帝王者王其
の政味を飲るを得ずし帝王とは人なり也
まゝなり

○今（一）世界の大战を我邦に教へる
に屈指數く来るとは百も千も何ん然んも
をん之推一を算し回し數の大なることと兵

此の論據に在り

祝賀軍兵に祝賀兵站に祝賀ありありは他の
二戦に其数の大なるをせんを之れを聞くに果
然自失せざるを得たり如何なる自道ある
流と華も七吾人の教を来と速くありし
甚に過をもあざる自元せざる然りし日本今後
の自奮を促すもの他もあらず一は是れこ
の何れりの大教訓也

○人に於て重しとすも人格を成す此を得んば
一過疵とすも是れを此に多くバ衆長録す
るは是れ也

○人晩の節を元々も心を致す可なり
歴社も一は是れ人の心を東事末路を思て

ハハと多年の幼と一朝に空あり或は萬物の
終り哀痛を例しと云ふ明んも日既と暮んて烟
霞却つて狗吠を見嵐將たるの逝るなりて
橙橋更らるる芳敷香を放つと見よや晩年
末路も人生の大悔の多し経歴の法昇期を掉
尾一着と安て了るなり此時なり

○吾んを死の宣告を受けしことあり然れども敢
之んせしむるも宣告を多けしことあり十数年奇
余の大患を罹りて醫師余に宣しと曰く此不次
の病も復爾半活動を断念せざるを得ずと
活動も余の生命也此の宣告も死の宣告と
相距る間一髪半は死の宣告也

まはらうとすも死の直先を想像せしむ

○古人多く未後の悔を云ふ甲乙四十と悔あり
り甲乙未後の悔を云く莫んと洵き二年小市を
填めは志後悔多しと得ること多し一々ん然ん
とも斯る歳言々を未境悲観非業を感する志境を
一傍に哀莫と云ふ者ありて而も其日人をと
るに未練を感せしむる外者感服する
は是らう初めの田生の経路を追懐せよ切
くせやうしるは田生は斯くせしむる
はと悔ありては多し又斯くしむ
んはこそと成切と悔ありては決しむる

東林堂製

之れを筆末りぬる是流

ありては一切一過一勝一敗之んを教し
来りぬる大流の未練の容易に判するの
は是れ一過一敗或る年輩の事なり
を録して瀕里面より思ふ也
ふんきい必く見未練日貪念を垂死の味
時、助長せしむる支那流の訓戒を
ぬる大江之れを厭ふ (二十四日録)

○墨川文房の寶札上の珍洲人日々親しむ安の者
一節の筆摩を十年其の壽口の磨も十年を起
り而して其價積キも三田田五田に過ぎる墨を在
を送ふべし而して購ふ年其時と臨み思ふ

かすい直筆を要せりともしと罷去吾ん中
とせ九の面を笑ふ

○昨夜九段坂上西四川開の火戯を觀る想ふ
江戸繁昌の日清候競つて火戯を演し衆座を
作し快くも錫の閑史此我の趣味なり
百田兩を投し連宵滿都排の歡呼は
す友人の語るを聞くは錫の閑史此我をぬみ
毎年資を投しは演せしむ徹宵連止る百兩
の烟火を打盡す然ハとと當時各候
一夕を占断す今日の言ふ事ありて云ハハ業
錫の閑史山内デーと云ふことキ者なりし
而して今も富豪此地の快閑なる先的

東林堂製

人

○
財を舟敷し富を街ふは物々此の快
閑なる戯に資を投するものを見す大氣
根津の徒何んを話候の爲に儼として四
鼎半一に一夕千兩を散らすと孰九
○人事毎に異を至て以つて目こぼしし
この身も吾輩取らざり日常の事天世俗に這ぬ
可時但此事大節に閑し能出度進退に閑
るも世俗に這ふを要せり我を至れるの時
世俗の日候を要せり也
○趣味も又知れどもあまう一葉の味を
あまうも大を要せり一葉の印味ありて
之れを得る又知れどもあまう一葉の野花田

野の趣あり床下の趣あり 盆池拳石河海山嶽の趣あり
唯此趣味を會得する事の由に之の趣の淵に於て
之れを得趣味を理會せざるもの百里跋渉するも終
に **物空しく** 得る所あり

○趣味の向上と淡きを喜ばず新しきを欲せざる
○念々向上せんが意に會する事の要り少し荒し癖
醜の別るべき趣味を **〇** 覺し **〇** 喜ばず **〇** 憂
一 随つて見んが隨つて有る **〇** 帰せんとせば寂
塵を傾く **〇** 亦 **〇** 唯此趣味の向上
之れを **〇** 是れ自然の **〇** 加減乘
除也

東海道
京大寺

○暑熱を喜ぶものと斗米足る人の事 一日の糧を得

る能はざるもの何れを暑熱を感ずん 葉葉終日芳
しと糧を一日の糧を得 葉葉の清涼を是れ
○婦人の貴ぶ **〇** 貞節 而して操守の厳を偏狭
を意味す 婦人の偏狭終に咎む可らず

○池永道雲の葉葉字一幅を購ふ道雲一幅と号
し **〇** 未年河の人中 **〇** 葉刻を以て其名あり其
第一刀葉象あり 本邦此人を以て **〇** 葉刻の嗜夫
とす 此幅上段に扇字を考し 左衣と聯を考す 曰
く 清風長在 花月不離 懷 善 夏時
適する幅 單に **〇** 葉刻趣味を感する **〇** 也

○夏時及至 攀高山の **〇** 極の **〇** 深夜 **〇** 道

説ゆを要するなき(高)之現代後にある事也(高)
雅文漢流の俗後を人心を動するもの(高)血キ
ハ殊に漢流に於て狂騒する事(高)漢流の(高)
議論を絶め(高)以て(高)同(高)を(高)并(高)三(高)又(高)漢(高)東(高)
可(高)多(高)馬(高)文章(高)の(高)形式(高)又(高)救(高)心(高)
の(高)片(高)つ(高)て(高)英(高)雅(高)の(高)事(高)も(高)あ(高)り(高)也(高)坊(高)け
本(高)未(高)文(高)章(高)漢(高)流(高)記(高)の(高)同(高)ト(高)異(高)ス(高)文(高)字(高)家
漢(高)流(高)を(高)記(高)す(高)る(高)事(高)も(高)漢(高)流(高)家(高)文(高)章(高)を(高)記(高)す(高)る(高)事(高)
所以(高)也(高)観(高)る(高)べ(高)し

○男女交接(高)書(高)ハ(高)公(高)然(高)と(高)秘(高)密(高)と(高)或(高)る(高)事(高)也(高)
く(高)一(高)と(高)其(高)面(高)目(高)を(高)醜(高)穢(高)の(高)め(高)く(高)し(高)て(高)神(高)聖(高)と(高)す(高)
痛(高)苦(高)の(高)極(高)快(高)楽(高)而(高)し(高)也(高)本(高)西(高)哲(高)の(高)死(高)を(高)以(高)つ(高)る(高)事(高)也(高)

東洋書院

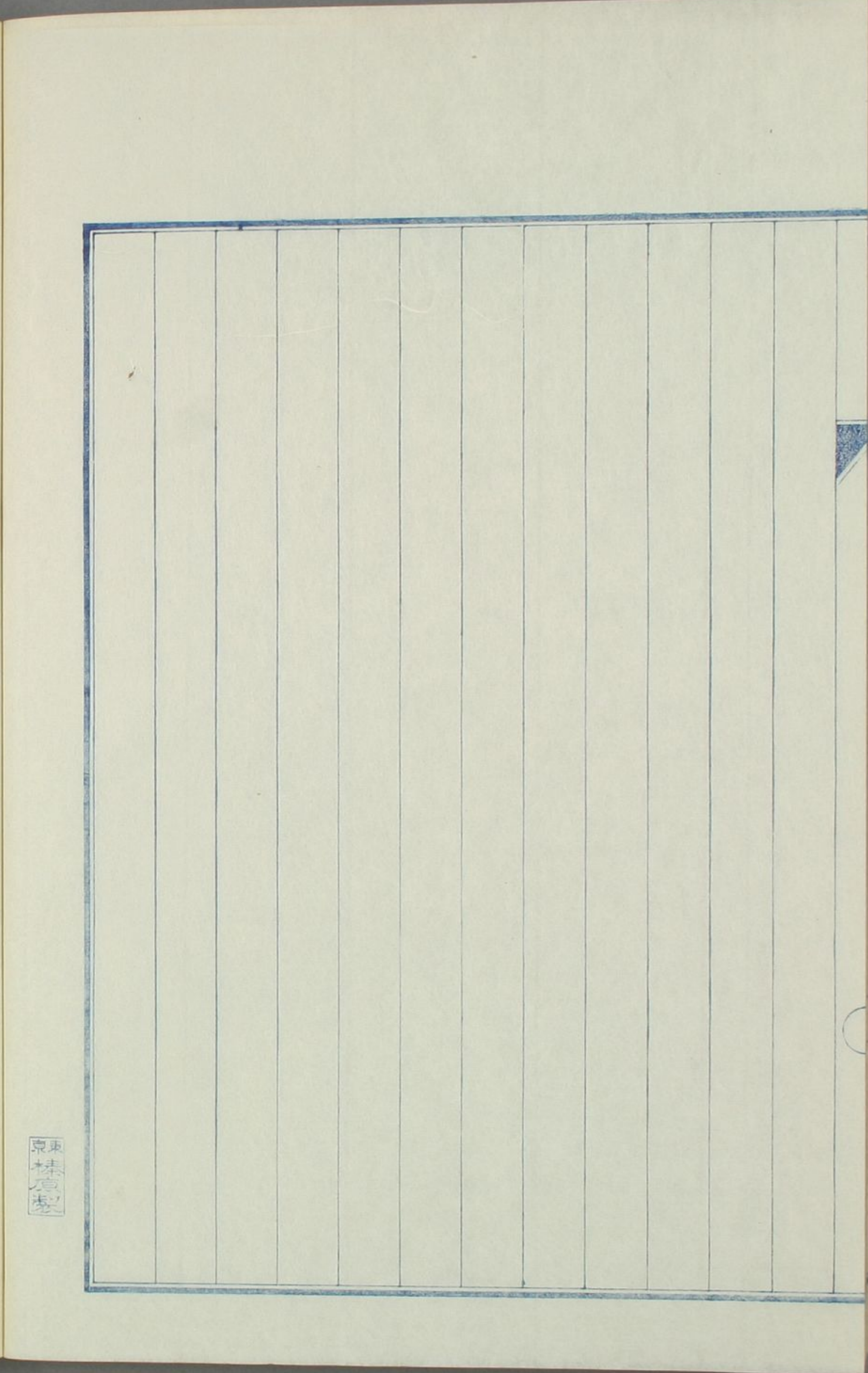
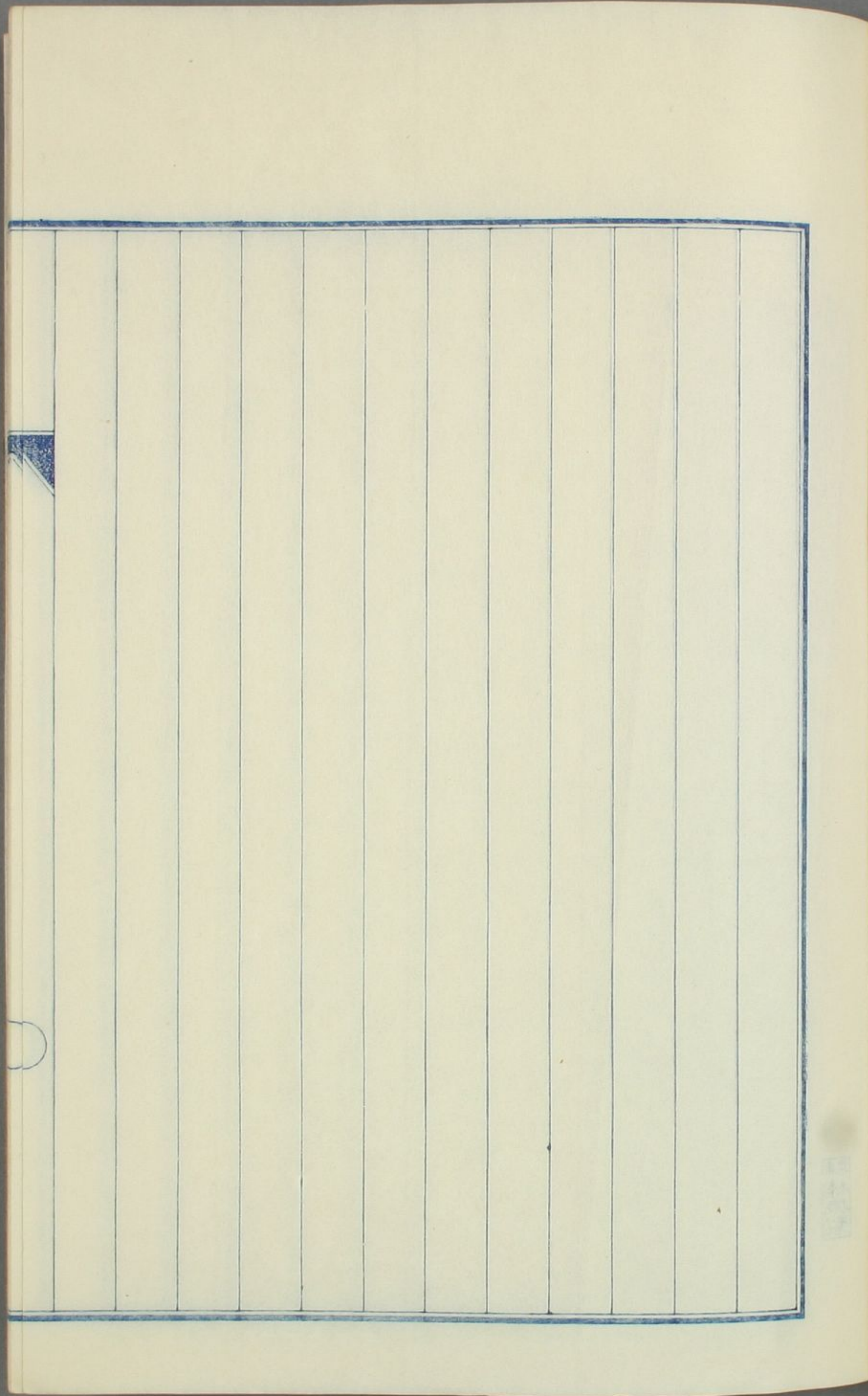
七平丸(高)と(高)非(高)出(高)と(高)評(高)し(高)る(高)事(高)も(高)一(高)人(高)の(高)事(高)也(高)
日(高)中(高)行(高)事(高)無(高)し(高)而(高)し(高)或(高)る(高)事(高)也(高)本(高)西(高)哲(高)の(高)死(高)を(高)以(高)つ(高)る(高)事(高)也(高)
○個性尊重セざる可(高)し(高)而(高)し(高)或(高)る(高)範(高)圍(高)を(高)起(高)す(高)
わ(高)る(高)事(高)も(高)不(高)可(高)と(高)す(高)英(高)國(高)に(高)徴(高)兵(高)主(高)義(高)を(高)行(高)ふ(高)事(高)ハ(高)
さ(高)ら(高)に(高)徴(高)セ(高)し(高)又(高)回(高)難(高)ニ(高)當(高)り(高)回(高)り(高)て(高)業(高)業(高)の(高)
起(高)る(高)事(高)也(高)徴(高)セ(高)し(高)

○骨董鋪(高)ニ(高)倉(高)心(高)の(高)物(高)を(高)價(高)を(高)測(高)く(高)ハ(高)不(高)廉(高)甚(高)し(高)
余(高)曰(高)く(高)佛(高)教(高)と(高)趣(高)味(高)の(高)賊(高)と(高)折(高)角(高)面(高)白(高)き(高)もの(高)を(高)
面(高)白(高)く(高)し(高)て(高)あ(高)ら(高)ぬ(高)事(高)も(高)價(高)七(高)目(高)或(高)る(高)程(高)度(高)を(高)起(高)し(高)
今(高)貝(高)の(高)域(高)ニ(高)入(高)ん(高)が(高)性(高)心(高)の(高)物(高)を(高)買(高)ひ(高)て(高)賣(高)る(高)事(高)也(高)殊(高)に(高)奇(高)を(高)失(高)ふ(高)

○書畫の骨髄を尋ねば、此の趣味に投ずる者は
購ふ可、或はの趣味を採らざる者も取らざる所也
筆墨を人の回舞せしめて定あるもの妨げず、
此の趣味を感ぜざる人の動かしめて購ふ不可也
如斯く若干の價ある者も花する之趣味と
相関せしむ

○或は人に誘はるる方あり、或は自ら其の好むもの
り、或は廉價に購ひて他の愛する方あり、或は其の
あり、或は定家正し、或は其の無差別に購
ふものあり、是れ又趣味と相関せしむ

○亦と知る如く趣味を感ぜざるものあり、或は其の
書と見る、或は其の好むものあり、或は其の好むものあり



以下全て
白紙

